

梅崎春生「幻化」論

— 久住五郎の精神世界 —

高木伸幸

はじめに

梅崎春生の「幻化」（昭和四十年六、八月『新潮』）は、「精神科病室」を抜け出した主人公・久住五郎が九州を旅する長編小説である。

五郎は桜島の見える鹿児島空港に降り立ち、二十年前兵隊として滞在した枕崎、坊津へ向かう。吹上浜を歩いて湯之浦温泉に泊まり、学生時代の思い出の地、熊本を訪れる。最終場面は阿蘇で迎える。

この「幻化」は、梅崎春生が死の間際に書き上げた遺作小説として知られ、それだけに作者が発表してきた作品との関連性から主に論じられてきた。

例えば、梅崎春生は「幻化」を書き上げることで「文壇的処女作『桜島』に回帰し、そのことによって我知らず作家の生涯を完結させている」との見方が繰り返し為されている⁽¹⁾。

また梅崎春生には、いわゆる「戦争もの」と、いわゆる「市井事もの」の二つの系列が見られることを念頭に置き、「幻化」においては「戦争ものと市井事もの」が、より高められた形で総合されている⁽²⁾との指摘も多く認められる。

これらの見方は、遺作小説として「幻化」が持つ枠組みを大まかに

捉えた、いわば通説として肯定できよう。「幻化」には作者の軍隊時代が顧みられている点において、「文壇的処女作」であり、「戦争もの」を代表する「桜島」と確かに重なる部分がある。また思い出の地で「つながりを確かめたい」という五郎の台詞は、「市井事もの」のモチーフにも通じる。これら通説を否定する必要性は認められない。

しかし「幻化」という小説には、こうした通説だけでは捉えられない、今ひとつの重要な設定、五郎を精神の病の持主として描いている側面がある。本論では、その五郎の人物設定に注目して考察を進めることとしたい。五郎の精神の病について、精神科医の立場から「病跡学」として分析した文章はいくつか見られるものの⁽³⁾、文学表現としての考察となると、十分為されてきたとは言いがたいからである。

結論を一部記せば、本論では「幻化」について、主人公・五郎の一人称的視点によって、精神を病んだ人物の内面世界を表出した小説と捉える。従って、梅崎春生が「幻化」を通して「社会と、社会の外部に配置される精神病とその患者との間の連続性を指摘し」「病というフラジリティを刻んだ者の視点に拠ることで、生きることの苦痛・恐怖・悲哀と生き続けることへの意志を表出した」と論ずる木村功の見解と⁽⁴⁾、本論は一部重なる部分がある。だが本論では、そのような考察

に加えて、五郎の人物設定を梅崎自身の問題と関わらせつつ、かつ同時代の社会と文学の中に置いて捉え直していくことに主眼を置いている。梅崎春生が当時の読者に向けて何を訴えようとしたのか、「幻化」における作者のモチーフと社会状況との関わりを追究することで、この遺作小説の新たな側面を明らかにできると考えたが故である。以下に考察を進めたい。

一

「幻化」の物語は、五郎の目に映った次のような光景を描いて始まる。

五郎は視線を右のエンジンに移した。

（まだ這っているな）

と思う。

それが這っているのを見つけたのは、大分空港を発って、やがてであった。豆粒のような楕円形のものが、エンジンから翼の方に、すこしずつ動いていた。眺めているとパツと見えなくなり、またすこし離れたところに同じ形のものがあらわれ、じりじりと動き出す。さっきのと同じ虫（？）なのか、別のものなのか、よく判らない。幻覚なのかも知れないという懸念もあった。

五郎は四十五歳。「悲しいような憂鬱な感じ」「漠然とした不安感」に襲われ「精神科病室」に入院、「持続睡眠療法」を受けていた。し

かし病院を抜け出し、九州へ向かう。途中、飛行機の窓を通して眺めたのが右の光景である。ここで五郎の目に映ったのは、実は飛行機の潤滑油であって、五郎の幻覚では結局なかった。入院前、五郎は「白い壁に蟻が這っている」ような幻覚をしばしば経験していたため、実際に自分の目に見えている光景を幻覚と区別しきれなかったのである。

物語の中盤に入ると、吹上浜を歩く五郎を描いた次のような場面がある。

追われて五郎は砂浜を歩いていた。追う者の正体は判らず、姿も見えなかった。しかし追われていることだけは、確かであった。その実感が五郎の全身にみなぎり、彼を足早にさせていた。

五郎は出会った漁家の中年女から乱暴に扱われ、「はん、はん、はん」という「はやし言葉のような」「大勢の歌声」が耳に聞こえてくる。しかし、この場面は五郎の実際の体験を描いているのではない。「秋の強い日」に「眩暈」を感じた中で、五郎が目にし、耳にした幻覚なのであった。

このように精神を病んだ人物である五郎は、現実の光景に対して幻覚ではないかと不安を抱き、また実際に多くの幻覚に捕われている。他にも五郎は入院前「玄関のブザーが鳴る」幻覚にしばしば襲われ、坊津で出会った女性と関係を結んだ後には「恥知らず！」という幻聴を耳にする。「自分が自分でない男に間違えられ」「透明人間になつたような気分」で居た熊本では、「化けおおせたことが、そんなに嬉

しいのか」という「声にならない声を聞いて」ているのである。

こうした五郎の幻覚に関わる描写について、一つ考慮に入れておくべきことは、「五郎」という三人称で記されつつも、語り手は五郎に寄り添い、五郎の内部から、いわば五郎の一人称的視点によって表していることである。

五郎の幻覚がいわゆる三人称、つまり五郎の外部から第三者的な視点によって描かれているならば、幻覚はあくまで幻覚として、現実とは区別される。五郎の精神の病を強調する表現として読者に受け止められるであろう。しかし「幻化」では、五郎の内部から、一人称的な視点によって表現されていく。五郎の幻覚・幻聴は全て、半ば実際にいま生じている出来事であるかのような感触を持って読者に伝わるのである。読者は五郎が精神を病んだ人物であることを理解しつつも、五郎と一体化して物語を読み進めていくために、五郎の幻覚を必ずしも異常（あるいは狂気）という範疇に収まらぬ出来事として捉えるのである。「幻化」に「現実とも非現実ともつかぬ」世界が表されていることは、同時代評において既に指摘されているが、実際は精神を病んだ主人公の幻覚、幻聴が多く表されているのであって、それを「現実とも非現実ともつかぬ」ように感じさせるのは、五郎の一人称的視点による。梅崎はこの表現方法を通して、五郎の精神世界を読者に追体験させているのである。

いま少し細かく「幻化」の表現について確かめてみよう。物語冒頭から間もなく、病院から抜け出す五郎の様子が次のように記されている。

こつそりと背広に着換え、入院費に予定した金を内ポケットに入れ、マスクをかけて病院を出た。(中略) 煙草を買い、喫茶店に入り、濃いコーヒーを飲んだ。久しぶりのコーヒーは彼の眠つたような情緒を刺戟し、亢奮させた。

（そうだ。あそこに行こう）

五郎は行き先を強く意識して病院から脱出したのではない。彼を九州へ向かわせた直接のきっかけは、喫茶店で飲んだ「濃いコーヒー」にあった。病院で「持続睡眠療法」を受けていた五郎は、コーヒーに含まれるカフェインによって覚醒され、意識の奥に眠っていた自分の考えに気付かされたと言えよう。

また五郎は鹿児島から枕崎に向かう際、飛行機内で隣り合わせた映画のセールスマン、丹尾章次が付いてくることにやや警戒心を持っていた。しかし丹尾と同乗したタクシー内においては、「さつき飲んだ焼酎が、車体の振動につれて、体のすみずみまで廻って来」たことにより、五郎は「しゃべり過ぎると思いがら」も丹尾と「しゃべっていた」。吹上浜を歩く五郎を描いた次のような場面もある。

約二キロ歩いた。

砂浜に上って、腰をおろす。(中略) 疲れて来たのだ。

「すこし飲むか」

(中略) 五郎は栓を抜き、一口含んだ。甘ったるく強烈なものが、食道を伝って胃に降りて行くのが判る。

五郎はポケットから、貝殻をざくざくつかみ出して、そこに並

べる。ついでにもう一口飲んだ。

風景が急に活き活きと、立体感を持ち始めて来た。ぼんやりと明るい風光が、むしろ蒼然と輪郭をはっきりして来る。

酒を飲むことで五郎は口数が多くなり、目に映る風景にも活き活きとした変化を感じている。アルコール摂取による心境の変化が、五郎の内部から表されていると言えよう。「幻化」には、カフェインやアルコールの作用を例に取りながら、人間の意識の変化のあり方を具体的に浮かび上がらせた表現も多く認められるのである。

さらに九州を旅する中で、五郎はさまざまな思い出の地に足を踏み入れる。その際の五郎の内面を描いた場面にも目を向けてみよう。

例えば五郎は終戦直後に歩いた枕崎から坊津に至る道を二十年ぶりに歩き、その風景から「甘美な衝撃と感動」を受けている。五郎は数年前、信州旅行で出会った風景に対して、子供の頃に見た風景から受けた感動を思い出したつもりでいたが、そうではなく、その「感動」はこの二十年前に歩いた道で受けた感動であることに思い当たったのである。そして五郎は終戦時の「体が無限にふくれ上って行くような解放」を思い出しながら、「感動と恍惚のこの原型」が「いつの間にか意識の底に沈んでしまった」こと、自分は「今朝コーヒーを飲んだ時、突如として坊津行きを思い立ったのではなく、以前から「意識の底のもの」が自分を「そそのかしていたのだ」と考えるのである。

また五郎が熊本、つまり旧制高等学校時代の思い出の地を訪れた場面においては、街を歩く五郎の感慨が以下のように記されている。

ここを離れて、五郎は時々この土地のことを思い出し、また夢にまで見た。それはいつも青春の楽しさや愚行につながっていた。楽しさや愚行に都合のいいように、街の相は彼の頭の中で、修正されているかも知れない。その修正と、現実の街の変貌が一致しない。

心の中にある風景と事実との相違、そこに加えられた修正、あるいはその風景の念頭への浮沈。〈記憶〉の不正確さを表しながら、意識の一端としての〈記憶〉の作用を浮かび上がらせているのである。先の吹上浜での五郎の幻覚の場面では、「いつの時か、どこ場所かも定かでない」が「追われていた」と思う五郎の意識について、「何かのきっかけで生じた贗の記憶なのか」とも記している。

以上のごとく「幻化」には、久住五郎の一人称的な視点を通して、幻覚や意識の変化、〈記憶〉の作用などが如何にもリアルに表されている。精神を病む人物の内面世界をその深層に迫りながら表現し、読者には自分自身が体験している出来事であるかのように感じさせる小説。それが「幻化」だとまずは言うことができる。

二一(1)

梅崎春生はこのような「幻化」をなぜ著したのか。先に作家自身の問題から確かめてみたい。

梅崎春生は「幻化」から約六年と半年前、昭和三十三年十月頃から心身の不調に襲われ、やがて「鬱状態（不安神経症状）」と診断され

ている。そして三十四年五月二十一日より七月十日にかけて近喰病院に入院し、持続睡眠療法を受けている。⁽⁶⁾その梅崎の症状と受けた治療は、「幻化」の五郎と重なる。この梅崎の入院体験が「幻化」の主人公像に反映されていることは間違いない。例えばアルコールによる五郎の意識変化などは、多量の飲酒によりアルコール中毒の傾向も見られた梅崎春生だからこそ描けた表現とも言えよう。また梅崎が持続睡眠療法による〈半眠半覚〉の状態、つまり記憶のあやふやな状態で約二カ月間を過ごしたことは、「幻化」において〈記憶〉の不正確さを表す基盤を創り上げたとも見られる。例えば梅崎の入院と「幻化」発表の間に位置する短編「記憶」（昭和三十七年七月『群像』）にも、同じ〈記憶〉の不正確さが表されており、その点からも持続睡眠療法体験の影響の大きさは裏付けられよう。

もつとも梅崎春生の精神を病んだ人々への関心は、入院体験以前から表れていた。木村功も指摘しているように、梅崎春生は「囚日」（昭和二十四年四月『風雪』別冊）「黄色い日日」（昭和二十四年五月『新潮』別冊）の短編二作において、早くも主人公らが精神病院を訪問する場面を描いているのである。以降、長編「逆転息子」（昭和三十三年五月〜三十三年五月『週刊東京』）、短編「凡人凡語」（昭和三十三年六月『新潮』）、短編「仮象」（昭和三十八年十二月『群像』）といった作品で精神病院、または精神を病む人々を取り上げている。「幻化」に至るまで一貫して関心を抱き続けていたと言えべきなのである。ただし、これらの小説を通読していくと、梅崎春生の入院体験を境にして、以前と以後とでは、精神病院・精神を病む人々に対する捉え方に明らかな変化が認められる。例えば「囚日」においては、「内包

している」世界が「歪んでき」た人間が入る場所として、「脳病院」と「刑務所」が同列に扱われており、「黄色い日日」では「気違いななるよりは、刑務所へ行った方がいい」と記し、精神病院を「刑務所」以下の場所として表している。精神病院・精神を病む人々に対する幾分かの嫌悪感、差別意識が認められ、梅崎も当時の人々の一般的な認識の範囲内にあつたと言わざるを得ない。

対して入院体験以降に書かれた「凡人凡語」では、精神病院入りを「見つともない」と考える知人に対して、主人公「ぼく」が「なぜ見つともないのか。病気なら仕方がないじゃないか。通念によりかかってばかりいるのは、ばかげた話だと思う」とコメントし、自分が精神病者の「部類に近いと判断」されることについても「ぼくは別段痛痒は感じません」と述べている。精神の病を恥ずべきこととは捉えず、患者の側に立った表現が為されているのである。世俗的な認識から梅崎は抜け出していると言えよう。

すなわち梅崎春生はかねてから精神の病に関心を抱いていた上に、「鬱状態」によって自ら入院した体験が加わったことで、精神を病む人々の世界に対して、いわば自分自身の問題として歩み寄り、理解を深めたと言える。「幻化」の久住五郎像を形成した梅崎春生の内的要因である。

二一(2)

次いで「幻化」執筆にあたって、梅崎春生が同時代の社会状況から受けた影響について検証してみよう。

昭和二十五年五月一日に「精神衛生法」が施行された。以降、「幻化」が発表された昭和四十年に至るまで、全国各地で急激な精神病院建設ラッシュが続き、その状況を指して〈精神病院ブーム〉とまで言われていた事実に注目したい。全国に設置された単科精神病院数を挙げれば、昭和二十六年においては148であった。それが三十年には260、三十五年には506、四十年には725まで伸び、約十五年間で五倍増となったのである。

「精神衛生法」以前、精神を病んだ人々に対しては、公安上の観点から各家庭の監護責任が義務付けられていた。その結果、大多数の精神病患者たちが座敷牢に閉じ込められ、社会から隔離された状態にあった。このような人権無視の状況を鑑み、精神病者たちの医療保護が正当に為されるよう、各道府県に精神病院の設置を義務付けたのが「精神衛生法」だったのである。同法も今日から見れば不十分な部分¹が認められるものの、そのことについてここでは触れない。ともかく同法の施行により、精神病院が実際に多数建設され、それまで座敷牢に閉じ込められていた精神病患者の多くが治療を受けるべく病院へ収容された。このことは、精神病者以外の人々から見れば、精神病院・精神病患者が目に見えて意識に上りやすい、多少なりとも身近な場所へ移動してきたことを意味しよう。

そうした精神病院に関わる社会状況の変化は、文学界にも少なからぬ影響を与えたと見ることができるといえる。特に昭和三十年代を代表する小説の中には、精神病院や精神の病を扱った作品が多く認められるからである。例えば芸術選奨文部大臣賞を得た島尾敏雄の短編集『死の棘』¹²（昭和三十五年十月、講談社）であり、同じ芸術選奨と野間文芸賞も

受けた安岡章太郎の「海辺の光景」（昭和三十四年十一月『群像』）である。島尾の短編集には主人公の妻の、安岡の小説には主人公の母の、ともに精神の病と精神病院入院が扱われている。両作家とも〈精神病院ブーム〉をどれだけ意識したか定かでないが、どちらも私小説的作風であり、それぞれ小説のモデルとして扱われた事実¹³それだけに、当時の社会状況が深く関わっている。また北杜夫の芥川賞作「夜と霧の隅で」（昭和三十五年五月『新潮』）、毎日出版文化賞作「檜家の人びと」（昭和三十九年四月、新潮社）の二作も精神病院を舞台としている。前者は精神科医たちを主人公に、ナチス政権下ドイツの精神病院内を描き、後者は作者の一族斎藤家をモデルにした榆脳病院の年代記である。どちらも歴史的な時代設定であり、島尾や安岡の小説と同列には語れない。とは言え、精神科医でもある北杜夫が〈精神病院ブーム〉に無関心であったとは考え難く、これら二作の執筆にあたって、そのような時代の空気を意識した部分は当然あったと言わなければならない。

いずれにしても上記の小説は全て、同時代の読者から見て、精神病院急増期の社会状況を想起させる作品であった。そして梅崎春生の「幻化」についても、読者にとつては、これらの作品と同様、時代を少なからず意識させる一作だったと思われるのである。

もともと「幻化」の五郎が入院したのは、「精神科病室」の中でも開放病室であった。対して島尾や安岡の小説には閉鎖病棟が描かれている。精神の病と言っても、表された症状は決して一様でない。しかし、そうではあっても、「幻化」が社会状況と関連する作品の一つとして、つまりある種の精神病患者小説として、当時の読者から読まれた

ことは確実と言える。実際、「幻化」発表から間もない平野謙の評を見ても、五郎は「精神病院の入院患者」である「半狂人」と捉えられているのである。

先に述べたように、梅崎春生は「精神衛生法」施行の前年に発表した「囚日」「黄色い日日」で既に精神病院を取り上げている。その関心は〈精神病院ブーム〉の影響を受けて始まったことではない。しかし精神病院建設ラッシュが始まってから書かれた「逆転息子」を見ると、後に自分も受けることになる「持続睡眠療法」を扱い、その治療中の患者の言動を面白おかしく、興味本位に描いている。この小説などは読者の興味を引き出す狙いから〈精神病院ブーム〉を意識し、そのような設定を選んだのは明らかであろう。また「幻化」から一年半前に発表された「仮象」では、主人公「彼」が「子供の時」には「神経科の病院はなかった」と言い、かつ「彼」が見舞いに訪れた神経科病院がかつて産婦人科だったことについて、「映画がテレビに押され」たように「産科じゃはやらなくなつたんで、身売りして神経科になった」との説明が見られる。遠回しな言い方ではあるが、これらも精神病院に関わる社会状況の変化を捉えた表現と言えよう。

このように梅崎春生も〈精神病院ブーム〉を意識していた形跡が認められる中で、「幻化」が発表される前年、社会の注目を大きく集める一つの事件が発生した。昭和三十九年三月二十四日、アメリカのライシャワー大使が十九歳の精神病患者に刺傷された事件である。この事件をきっかけに、「新聞は、精神病患者が事件をおこすたび、それを社会面にぶちぬきで大々的に報じた。見出しに、『またも野放しの精神病者』と書いた」のである。世間には〈精神病者は危険な存在〉

との偏見が広まったことは言うまでもない。

この事件、と言うよりもこの事件に関わる一連の報道は、梅崎春生の「幻化」執筆に少なからぬ影響を及ぼしたと見ることができる。「幻化」の主人公・久住五郎は「精神科病室」を無断で抜け出し九州の旅へと出かける。当時の読者にとって、五郎は、新聞報道で言う「野放しの精神病者」そのものに見えたことであろう。そのような主人公を梅崎があえて設定したのは、〈精神病院ブーム〉が続き、ただでさえ精神を病む人々に注目が集まりやすい社会状況の中、ライシャワー大使刺傷事件をきっかけに始まった新聞報道のあり方に対して、強く反発を感じるところがあったからに違いあるまい。自ら入院体験を持つ梅崎春生は、精神病者に寄り添う形で、一つの異論となる表現を提示したいと考えたのではあるまいか。その意味で「幻化」を〈精神病院ブーム〉との関わりから捉えた当時の読者は、必ずしも作者の意図から外れていなかったとも言えよう。

「幻化」に先行する島尾敏雄の短編集『死の棘』、安岡章太郎の「海辺の光景」、北杜夫の「夜と霧の隅で」「榎家の人びと」は、それぞれ夫、息子、医師の視点から精神病患者を描いていた。対して梅崎春生の「幻化」は、作者自身の経験を反映させることで、精神を病む主人公自身による一人称的視点を設定した。精神病者に対する偏見が渦巻く当時の日本社会へ向けて、精神を病む人々の内面世界が実際に如何なるものであるか、目に見えるごとく表現してみせた小説。「幻化」はそのように捉え直せるのである。

以上のような考察を踏まえて、五郎の内面世界がどのように表されているか、改めて検討したい。

例えば五郎は自分がなぜ「精神科病室」を抜け出したのか、その理由に思いを巡らしながら、「正常人が異常心理になるのを恐怖するよ
うに、異常心理者は正常に戻るのをおそれるんじゃないか?」「正常と異常は、紙一重の差に過ぎないだろう」と考えている。また医師から診察を受けた際、「重いもの(つまり抑圧)」が「頭にかぶさつた状態、いわば兜をかぶったような症状であると説明され、次のような感慨を抱いている。

兜をかぶっているのが常人で、今のおれの場合は兜を脱ぎ捨てた状態じゃないのか。頭がむき出しになっているから、普通人が持たない感覚を持ち、感じないものを感じているのではないか。生きていくつらさが、直接肌身に迫って来るのではないか。その点おれが正常人の筈だ。

五郎は「これがおれの正体じゃないか。今まで不安を忘れたり、避けたりして、ごまかして来たんじゃないか。おれだけじゃなく、みんな」とも考えている。つまり五郎は正常と異常の差を紙一重と考える上に、医師とは真逆の見方でその二つを捉えようとしている。言い換えれば、正常と異常、正気と狂気は区分できず、時に入れ替わりさせるとの考えである。

こうした「幻化」に見る梅崎春生の考えは、木村功も指摘している¹⁷

ように、「囚日」「黄色い日日」の二作において、既に萌芽を見ることができる。とは言うものの、先にも検討したごとく、これら二作の時点では、精神を病む人々に対する嫌悪感、差別的な意識も表れていた。梅崎春生の入院体験がやはり重要であり、それ以上にライシヤワ―大使刺傷事件後の社会に反発する梅崎のメッセージがこれら五郎の言葉には含まれていると言えよう。すなわち「野放しの精神病者」との偏見に満ちた報道が広く流れる当時の日本社会に向けて、正常と異常、正気と狂気が実はボーダレスであることを訴えている。精神を病む人々に差別的な視線を向け、自分は正気だと思い込んでいる当時の多くの日本人に向けて、人は誰でも狂気を内に秘めていること、精神病者の世界が決して特異なそれではなく、万人の身近な場所にあることを主張しているのである。一人称的視点により、五郎の内面世界に読者を同化させながら提出されるその主張は、自然に受け止められ、読者を説得させる効果十分と言えよう。

さらに「幻化」の最終場面は次のようである。阿蘇へ至った五郎は、枕崎まで同行した映画のセールスマン丹尾章次と再会する。阿蘇山頂の火口を訪れた二人は、そこで二万円ずつ出した賭けをする。丹尾が火口一周に出かけ、途中で火口に飛び込めば丹尾の勝ち、飛び込まず戻ってくれば五郎の勝ち、という丹尾の命がかかった賭けである。丹尾が火口一周に向かうと、五郎はその姿を有料望遠鏡で追う。丹尾が「よろよ」と「つまずいた」りしながら歩いているのが目に入ると、五郎は「丹尾を見ているのか、自分を見ているのか、自分でも判らないような状態」になる。「しっかり歩け。元気出して歩け!」という五郎の「胸の中」の「叫」びを記しつつ、物語は結ばれる。

この最終場面において見逃してならないのは、丹尾から賭けの話を聞かされた際、五郎がこの物語で初めて「笑ってる」ことである。しかも五郎は「声を立てて笑」い、彼の中から「笑いは次々湧いて」きているのである。

五郎が笑ったのは、直接には丹尾が自らの命に関わる賭けを申し出したことに対してであり、どこがおかしかったのか、いま一つはつきりしない。だが理由はともかく、笑えるということは、五郎の精神状態が「悲しいような憂鬱な感じ」「漠然とした不安感」を克服し、健全さを取り戻していることを表す。「精神科病室」を抜け出し、枕崎、坊津や熊本など、思い出の地を経巡って阿蘇山火口に辿り着いた五郎は、自らの過去を見つめ直すことで、健全な精神を取り戻すことができたのであろう。

そのように考えると、五郎が火口を一周する丹尾に向けて、激励の言葉を発しているのも、五郎が笑える状態を取り戻したからこそできたことと言える。そしてこの五郎による激励の言葉は、丹尾に対してでありつつも、同時に五郎自身へも向けられていることは一読して明らかであろう。丹尾は妻子に先立たれて以来、酒浸りの生活に陥っており、五郎と同じ「悲しいような憂鬱な感じ」に捕われている人物と言える。丹尾は五郎の分身と指摘される所以である。¹⁸つまり「元氣出して歩け！」というその言葉は、丹尾を激励すると同時に、五郎が自らの病の回復を確認した意味を持つ。そしてその言葉の奥には、五郎や丹尾と同じ病に苦しむ人々へ向けた、作者による激励が隠されているのである。

おわりに

かくて梅崎春生の「幻化」は、主人公・久住五郎の一人称的な視点により、幻覚や意識の変化、記憶の作用など、精神を病む人物の内面世界を詳細に表している。その表現を通して、精神の病が実は身近な場所にあることを訴えつつ、一つの病からの回復過程を例示した小説なのである。そのモチーフは、自らも入院体験を持つ梅崎春生だからこそ表し得た、同時代の日本社会へ向けたメッセージでもあった。梅崎春生の内なるモチーフの成長と社会に対する関心の高さを裏付ける「幻化」は、やはり作者の最期を飾る遺作小説に相応しい一作であったと言えよう。

注

(1) 平野謙「今月の小説(上)」(昭和四十年七月二十二日『毎日新聞(夕刊)』)、江藤淳「文芸時評(上)」(昭和四十年七月二十六日『朝日新聞(夕刊)』)など。引用は前者による。

(2) 本多秋五「解説」『梅崎春生全集』第一巻、昭和四十一年十月、新潮社)、森川達也「解説」『幻化』昭和四十九年二月、新潮文庫)など。引用は前者による。

(3) 伊東高麗雄「梅崎春生」(宮本忠雄編『診断・日本人』昭和四十九年七月、日本評論社)、林美朗「梅崎春生試論―病いと戦後をめぐる病跡学的一考察―」(『表現の精神病理学―病跡学の世界―』平成十七年九月、青山社)など。

(4) 「メラニコリーの光学―梅崎春生における鬱病の病理とその言語表象―」

- (平成十六年八月『敍説Ⅱ』08)
- (5) 平野謙「今月の小説(上)」。
- (6) 「年譜」『梅崎春生全集』第七巻、昭和四十二年十一月、新潮社) および梅崎春生のエッセイ「二聖の曲り角で」(昭和三十四年六月『新潮』)「神経科病室にて」(昭和三十四年十月『新潮』)「私のノイローゼ闘病記」(昭和三十八年六月『主婦の友』) 参照。
- (7) 梅崎春生の主治医であった廣瀬勝世著『人生 幻化ニ似タリ』梅崎春生のこと(平成七年十一月、成瀬書房) 参照。
- (8) 注(4)に同じ。
- (9) 以下の精神病院を巡る社会状況についての考察は、岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』(昭和三十九年七月、勁草書房)、矢野徹・仙波恒雄著『精神病*その医療の現状と限界』(昭和五十二年三月、星和書店) 参照。単科精神病院データは後者に拠った。また前者には次のように記されている。「最近俗ないい方であるが、〃結核のつぎが精神病の時代だ〃といわれているのは、この増加状態をさしている。実際に最近2〜3年の精神科病床の増加ぶりは年間1万から15000床という急増ぶりであるが、これは1950年から1955年にかけて、結核病床が年間に2万から3万床も増加した当時の勢いに似ている。そしてこの状態はいましばらく続くものと思われるが、これはまさに精神病院ブームと呼ばれるのにふさわしいものである。」
- (10) 明治三十三年に成立した「精神病患者監護法」は、「家族に精神病患者監護の責任を義務づける一方で、それ以外の者が精神病患者を監禁するのを禁止」た法律であったが、「もっぱら公安上の観点から、私宅監置をのみとめ、精神障害者の社会隔離をめざしていた点に問題があった」。この法律の下で「座敷牢に精神病患者」が「放置」される状況が「精神衛生法」成立まで続いた(岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』による)。
- (11) 「精神衛生法」は「戦後のデモクラシーの影響をうけ、患者の治療、人權をうたう部分が配慮されている」ものの、実際は「精神衛生鑑定による強制入院」を中心に運営されていた。「私宅監置制度」を廃止した点では大きな前進であったが、たとえ病院収容であっても、「精神障害者を社会から隔離する」発想においては「精神病患者監護法」に通ずる側面が残されていた(岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』、矢野徹・仙波恒雄著『精神病*その医療の現状と限界』による)。
- (12) 「家の中」(昭和三十四年十一月『文学界』)「離脱」(昭和三十五年四月『群像』)「死の棘」(昭和三十五年九月『群像』)「治療」(昭和三十二年一月『群像』)「ねむりなき睡眠」(昭和三十二年十月『群像』)「家の外で」(昭和三十四年十二月『新日本文学』)の六短編を収録。このうち「離脱」「死の棘」二作は、その後不定期に書き継いだ作品と併せて長編『死の棘』(昭和五十二年九月、新潮社)として刊行された。
- (13) 島尾敏雄の妻ミホは、「心因性反応」により昭和三十年一月から十月にかけて、慶応大学病院神経科、国立国府台病院精神科に入院。島尾敏雄は一連のいきさつを『死の棘日記』(平成十七年三月、新潮社)に記している。また安岡章太郎の母・恒は昭和三十二年七月、高知市郊外の精神病院精華園で逝去した(阿部昭「安岡章太郎」『日本近代文学大事典』第三巻、昭和五十二年十一月、講談社) 島居邦朗編著『鑑賞日本現代文学』28 安岡章太郎・吉行淳之介(昭和五十八年四月、角川書店) 参照。
- (14) 注(1)に同じ。
- (15) 失業者の白壁長門は、アルコール中毒患者の老人・桜丸十兵衛から秘書

として雇われる。入院し持続睡眠療法を受ける十兵衛は、半眠半覚状態でさまざまなことを口走り、長門に大金を渡す。真に受ける長門は大金を各方面に投資する。しかし弟・桜丸大吉郎が現れ、十兵衛が無断で持ち出した金であることが判明。長門は大吉郎から返金を迫られる。この「逆転息子」を書くにあたって、梅崎が持続睡眠療法に興味を持ち、「実際に医師の教えを乞い、医書をひもとき、病院を参観したりし」たことは、エッセイ「神経科病室にて」で触れられている。

(16) 岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』、石川信義著『心病める人たち―開かれた精神医療へ―』（平成二年五月、岩波新書）参照。引用は後者による。

(17) 注(4)に同じ。

(18) 和田勉『「幻化」論』、『梅崎春生の文学』昭和六十一年十一月、桜楓社）、渡邊正彦「梅崎春生の分身小説」、『近代文学の分身像』平成十一年二月、角川書店）など。

梅崎春生の作品引用は、『梅崎春生全集』全七巻（昭和四十一年十月〜四十二年十一月、新潮社）に拠った。

（たかぎ のぶゆき、別府大学准教授）